

「剥製はくせいづくりは自然観察が基本です」



青木 秀夫さん
(65歳・大字古河)

よい製品をより永く

地球温暖化や砂漠化など環境問題が世界中の関心事になっています。環境の悪化は生態系ひんにも大きく影響し、貴重な動植物が絶滅の危機に瀕しています。そこで今回は、生物学の資料ともなる鳥獣魚の剥製を30年前からつくり続け「青木剥製所」を運営している青木秀夫さんを訪ねました。

「自然が好きで、カメラや釣り、狩猟を趣味でやっていました。当時の古河猟友会には550人の会員がおりまして、渡良瀬遊水地は日本有数の鴨の猟場でした。自分で獲った山鳥などを保存するために東京の「上野剥製所」に持って行ってから剥製に興味を持ちまして、すぐに上野純治師匠に弟子入りをしました。3年ほど修業してから仲間の仕事を受けられるようになり、自信もできましたので昭和50年に日本剥製師協会発足と同時に店舗を構えました。

ぶんがくかん発
Vol.60

大橋千晶さん「月と頭蓋」で茨城文学賞受賞

褐色にただれた山並みが 連なっている その低い地平線上の上の空を 大きな獣の 白く晒された頭蓋ずがいが 漂っている 夏の日のひまわりや 赤い罌粟の花々が 同じように 花芯を上下にしながら 漂っている わたしをかすめていく風は 乾いたわたしの髪をゆすって 青白く光る実のなっている 樹々の方へ見えなくなる 「月と頭蓋」より

一昨年の粕谷栄市氏の詩歌文学館賞受賞、本年度来哲蔵氏の現代詩人賞受賞と古河ゆかりの詩人たちの活躍が目立ちますが、もうひとり古河には素敵な詩人がいることをご存じでしょうか。

平成10年10月、茨城県芸術祭文学部門実行委員会主催の茨城文学賞の詩部門の受賞者大橋千晶ちあきさんがその人です。茨城文学賞は、茨城県内の文学創作運動を高め、またその作品を広く県民に知ってもらう目的で設けられたものです。大橋さんの第2詩集「月と頭蓋」が平成10年の受賞作品となりました。

大橋さん(本名粕谷千晶)は、1936年旧満州国撫順ぶじゅんに生まれました。早稲田大学文学部を卒業後、同窓の詩人粕谷栄市氏と結婚。詩誌「ロシナンテ」「花・現代詩」をへて現在「幻視者」の同人として詩作を続けています。

1975年12月に第1詩集「たずねる」を詩学社より出版。1998年5月には第2詩集の「月と頭蓋」を書肆山田より出版しました。



「月と頭蓋」装画 岡安歌子

現代詩を代表する詩人の一人であり詩誌「ロシナンテ」を主宰していた石原吉郎氏は、詩集「たずねる」の跋文はつぶんで、大橋さんの詩について次のように述べています。

彼女の詩篇の全体の主題となっているもの。それをしも私は、「自由」と呼んでいいのではないかと思う。あたたかくゆるされた不自由。それがおそらくは、彼女の自由ということであろう。避けがたく下降をたどるものにとって、自由の位相いそうはかくもねんごろである。

そしてそのようにして、ひとつの終わりのように訪れてくる自由を、だれが拒むことができるだろうか。